

美術専攻 工芸研究領域 (刺繍)

スズキ アリ

鈴木 亜理



サンサーラ

日本刺繍、摺箔

サンサーラ

五感を通した「とき」の表現

私は、身近な環境にある美しい風景や自分自身の五感を通して感じる様々な「とき」を表現するために布や糸を染めて刺繍作品を制作している。大学院1年次に身近な環境の多摩川流域の植物や鉱物を染材として採取し、染料や顔料を制作しオリジナルの色を創出し、刺繍の創作との融合を図る研究を重ね修了制作に用いた。堤防に生えている草花を摘み石を拾いながら景色を眺めていると、季節がめぐり、時が流れているのを強く感じた。そして、そこにある万物には魂が宿り、命が循環していると感じタイトルを「サンサーラ」にした。サンサーラは、サンスクリット語の輪廻転生で、次の世に向けて何度も生と死を繰り返し転生する事を意味する言葉である。春は「誕生し命の芽吹きするとき」、夏は「成長のとき」、秋は「命が実り満ちるとき」、冬は「死して次の世に備えて力を蓄えるとき」である。本制作では、秋を表現した。モチーフの真菰草（マコモグサ）は、多摩川に生息し成長すると2メートルにもなる植物である。真菰草は「神が宿る草」と古来より呼ばれ、現在でも神社のしめ縄や神事に使われている神聖な植物である。成熟し枯れていくがその中に来年の芽吹きのために力を満たした美しく少し儂い姿を黄昏時の空を背景に真菰草のシルエットを浮かび上がらせる事で表現している。世は無常であるが、無常ゆえに逞しく命を繋いでいく命の循環の世界を表現し、輪廻の先で再び大切な人達に会える事を祈って制作した。作品の基布は、多摩川の黄昏時を現すために、多摩川の石から作った顔料でシルクオーガンジーを染めて布を重ねる事で秋の空の色合いを深めた。画面を覆いつくす真菰草は、絹の刺繍糸を多摩川で採集した真菰草を無媒染、アルミ媒染、鉄媒染する事で色のバリエーションを増やした。草の密集した様子は糸の密度を変えて何層にも重ねる事で奥行きを出した。多くの天然素材は長い年月をかけてその場に存在しているもので、それらを染材として使用して悠久の「とき」を表現した結果、素材の持つ色や表情が時を重ねたものの表現としてふさいわしいと感じる事が出来た。今後は様々な地域の風景を、その土地に由来する素材を使って制作を続けていきたい。